

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720014

研究課題名（和文）ユダヤ教超正統派における反シオニズム・イデオロギーの形成と変容

研究課題名（英文）Formation and Transformation of the Anti-Zionist Ideology among the Ultra-Orthodox Jewry

研究代表者

赤尾 光春（AKAO MITSUHARU）

大阪大学・人間科学研究科・特任助教

研究者番号：90411694

研究成果の概要（和文）：本研究では、これまでは個別に研究される傾向にあったディアスポラのユダヤ教（文化）とシオニズム及びイスラエル国家（社会）とをめぐる事象を対位的に関連付けて研究する視座の確立に寄与した。そうした複眼的視座を発展させる上で、「ガルート（神罰としてのユダヤ人の離散／追放）」の神学に忠実であったがためにシオニズム及びイスラエル国家に原理的な反対を表明し続けてきたユダヤ教超正統派のポリティクスとプラクシスの分析と解明が中心的な役割を果たした。

研究成果の概要（英文）：This research project has contributed on establishing a method of “counterpoint” to connect the Jewish culture developed in Diaspora and Zionist-Israeli culture rooted in settlement in Palestine, which are tended to be analyzed and discussed rather separately. It has shown how the ultra-orthodox Judaism has reacted to the Zionist Movement, re-interpreting the traditional theology such as “Galut”(Exile of the Jews) and “Ge’ulah”(Redemption of the Jewish People) both to counter against and adopt to the Zionist hegemony in Jewish Society in the modern era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：ユダヤ教、シオニズム、イスラエル、ディアスポラ、超正統派

1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで、主としてソ連崩壊後にウクライナで復活したユダヤ教超正統派の一派による聖地巡礼という事例の民族誌的研究を行ってきたが、その過程で明らかになったのは、今日の超正統派社会には、神学的次元において反シオニズム・イデオロギーが温存されながらも、実践的次元ではイスラエルという土地への土着化の傾向が同時に

見られることであった。この一見矛盾するかに見える現象については、ここ数年、イスラエルの人類学者やジャーナリストによって度々指摘されてきたことでもあるが、それは、超正統派の政治・社会的進出と右傾化という二点に要約される。すなわち、左派労働党から右派リクード党へと政権交代が行われた1970年代後半を境にして、元来ハト派として知られていた超正統派が、急速に右傾化した

というものである。

たとえば、A. Ravitzky, *Messianism, Zionism, and Jewish Religious Radicalism* (1993)は、超正統派の社会進出にともない、イスラエル国家への政治的中立という伝統的スタンスが崩れたことが、世俗界との軋轢と右傾化の原因であると述べているが、それ以上論及はない。一方、Sh. Ilan, *Kharedim be' a"m* (2000) (『有限会社ハレディーム』)は、すべてシオニズムと左派労働党とに関わるものへの伝統的な嫌悪感の裏返しにすぎないと論じるに留まり、Y. Sheleg, *hadatiyim hekhadashim* (2000) (『新宗教派』)は、イデオロギー的な変化とはまったく無関係であると断じている。また、日本で唯一超正統派についての研究を残している臼杵陽氏も、『原理主義』(1999)の中で、スファルディーム系の超正統派政党の右傾化を、リーグド政権下で自らの共同体運営の予算を得るための戦略であると触れているに過ぎない。以上の議論は、短期的現象としての説明にはなりうるものの、これがパレスチナ情勢の悪化による一時的な傾向に過ぎないのか、それとも社会構造や価値観にまで関わる本質的な変化であるのかは、先攻研究においてはいずれも解明されることはなかった。

この問題に正面から答えるためには、Ravitzkyのような長期的視野に立った社会思想史的な研究と Ilan などによる時事的なアプローチとをつなぎつつ、そこで得られたデータを実証的なフィールド調査で裏付けるような総合的研究が要請されているが、そのような研究は現時点では行われていない。

2. 研究の目的

19世紀末に産声を上げたシオニズム運動は、イスラエルへの帰還という伝統的な救済の神学を換骨奪胎することによって「ユダヤ人国家」イスラエルを誕生させたと言えるが、イスラエルの建国後もなおこの救済の神学に固執し、「ユダヤ人国家」の正当性を基本的に認めていない特異な社会集団が存在する。それが、19世紀末の中・東欧地域で形成されたユダヤ教超正統派(別名ハレディーム)と呼ばれる集団である。本研究は、このハレディーム社会の発展過程を、主としてその反シオニズム・イデオロギーとその実践形態の変容という観点から辿ることにより、ユダヤ教、シオニズム、そして現代イスラエル国家の間に見られる錯綜した関係を歴史的かつ理論的に解明することを目的とする。

同時に本研究では、ユダヤ・フォークロアや世俗の東欧ユダヤ文化(ヘブライ文学、イディッシュ文学等)におけるディアスポラとイスラエルの相克に関する総合的知見を深めつつ、超正統派におけるディアスポラ主義

と反シオニスト・イデオロギーの問題と関連付ける作業も並行的に行っていく。とりわけ、ユダヤ的伝統の中につねに脈打ってきたディアスポラ肯定論と否定論との緊張関係が、19世紀末のシオニズム運動の胎動期からイスラエルの建国を経て現在に至るまでに、いかなる変容を被ってきたのかを、1)ユダヤ教とシオニズムの相克、2)シオニズム運動の内部対立(政治的シオニズムと文化的シオニズムの対立など)、3)ユダヤ人社会内におけるシオニズムと他の世俗的思想運動(社会主義、文化自治主義、リベラリズム等)とのヘゲモニー争い、という三つの対立軸から跡づけ、イスラエルへの帰還と建国という、近代国民国家思想に裏打ちされた目的論的なシオニズム史観の脱構築を目指す。

また、この作業と並行して、領土国家や政治的覇権に基づかない脱領域的な文化的アイデンティティの追求という、ディアスポラ・ユダヤ文化に歴史的に見られた反/非シオニスト的局面の再評価を通して、現代においてもなお支配的なエスノクラシー的な国民国家のあり方を批判する思想的可能性を探ることも視野に入れている。

3. 研究の方法

本研究では、ハレディームの反シオニズム・イデオロギーとその実践形態に主要な変化が起きた時期を、(1)シオニズム運動の胎動期、(2)ナチス・ドイツの台頭からホロコーストまで、(3)イスラエル建国、(4)ハレディーム政党が連立政権入りを果たした1970年代末から現代まで、という4つの段階に大別した上で、これらの各歴史的段階に生じた政治情勢の変化と具体的な歴史的イベントを前にして、超正統派が見せた伝統的なユダヤ教神学の再解釈の仕方と社会的行動パターンの基本的な変化を記述するとともに、両者の因果関係と相互影響関係の把握に努める。

その過程で明らかにしようとするのは、①シオニズム運動の影響力拡大に対する全面的な反発からナチス・ドイツの台頭に伴う部分的協力関係へと移行する過程で、救済を巡るユダヤ教神学上の問題がいかに解決され、ハレディーム社会の構造にいかなる変化がみられたのか、②イスラエル建国をめぐるシオニストとの交渉において、ハレディームが「ユダヤ人国家」を非神聖化しつつ自らは文化的自治に籠ることで神学上の問題を回避しながら、一方でイスラエルの「ユダヤ性」確保に積極的に寄与したという二重性が、イスラエル社会とハレディーム社会にいかなる意義と効果を持ったのか、③世俗社会との軋轢が激化する過程とともに生じたハレディームの右傾化の理由の3点である。

そこで本研究では、ハレディーム社会の反シオニズム・イデオロギーとその実践形態の変容過程を明らかにするために、第一に、「捕囚」(galut)とその「贖い」(ge'ula)という、伝統的なユダヤ教神学の中心概念に着目し、ハレディーム社会の指導層である歴代のラビたちが上述の4つの歴史的発展過程においてこの両概念をいかに再解釈してきたかを辿る。第二に、イスラエル建国後におけるハレディーム社会の政治活動の主要なパターンの変化を跡付けることにより、超正統派社会の政治神学的イデオロギーと社会的行動パターンの相互関係とその変容過程を説明する。さらに、以上の研究によって得られた神学的・政治的側面の知見が、日常レベルで観察されるハレディームの社会的実践においていかに反映されているのかを見極めるために、フィールド調査を行なう。

具体的には、イスラエルに滞在し、エルサレム・ヘブライ大学国立図書館や超正統派各派の公式機関等に通い、シオニストの回想録や、中・東欧及びパレスチナにおいて当時発行されていたハレディーム組織「イスラエル同盟」の機関紙等の一時資料（主としてヘブライ語、イディッシュ語）の収集と読解作業を行い、地上における「ユダヤ人国家」の建設という神学上の難問に直面したハレディームが見せた二重の文化戦術のメカニズムとともに、超正統派社会が長年にわたる自発的隔離状態を脱し、政治的にも社会的にも進出し始めたことにより、世俗社会との軋轢が激化する過程とともに、ハレディームの右傾化をめぐる因果関係について解析する。以上の通事的分析で得られた主な発見と比較検討することにより、神学的理由により「ユダヤ人国家」に否定的評価ないし中立的立場を採ってきた超正統派が、なぜここに至ってイスラエル政治の表舞台に登場し、離散の地で培われた、異教徒との融和を基本とする平和主義的なスタンスを硬化させたのか、長期的視野に立った総合的な評価を下す。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、これまでは個別に研究される傾向にあったディアスポラのユダヤ教（文化）とシオニズム及びイスラエル国家（社会）とをめぐる事象を対位的に関連付けて研究する視座を打ち出した点に集約できる。

国内のユダヤ研究には、ディアスポラ・ユダヤの研究か現代イスラエル研究かに二極化する傾向があるため、両分野間の実りある対話を困難にしているが、ハレディームの研究を通して、日本国内では研究が進んでいない現代ユダヤ教とユダヤ人国家の関係に取り組むことの重要性を示すことができた。デ

ィアスポラ文化の継承者としてのハレディームを、シオニズム運動の発展史の中にも位置付ける本研究は、この意味で、国内のユダヤ研究にも一石を投ずるものとなる。

また、本研究では、ハレディーム社会にみられるイデオロギーと実践との間のジレンマに光を当てることで、ディアスポラの伝統に培われたユダヤ教と、イスラエル国家の建設後に生じたユダヤ人社会の空間認識における劇的な変化を、相互に関連づけて説明することも可能にした。

その結果、神学上の理由から「脱領域性」を行動原理としてきたハレディームが、「領土国家」を絶対視するシオニズム運動を相対化する潜在的可能性を持つことを示した。これは、「ユダヤ教＝シオニズム」という社会通念からは見落とされていた視点であり、パレスチナ問題の認識自体にも新たな光を当てる可能性を秘めている。

なお、本研究プロジェクト期間での成果発表は間に合わなかったが、2011年度中に、関連する編著二冊の刊行が確定している他、著書一冊を刊行準備中である。(1) 臼杵陽（監修）、赤尾光春・早尾貴紀（編）『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』（人文書院）：(2) 赤尾光春・早尾貴紀（編）『ディアスポラの力を結集する——ギルロイ、スピヴァック、ボヤーリン兄弟』（松籟社）：(3) 赤尾光春『ユダヤ文化の弁証法——ディアスポラとイスラエルのはざままで（仮題）』（講談社メチエ）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①赤尾光春、『「トラーの名において」の影——イスラエルに依存するユダヤ教超正統派の両義性』『インパクション』、査読無、第175号「終わらない植民地支配——沖縄・パレスチナ・グアム・アイヌ」、(2010)、59-63
- ②赤尾光春、「シュテットル再訪——パスポートと軍隊のない『ユダヤ王国』」、『ナマール』（神戸ユダヤ文化研究会編）、査読無、15巻、(2010)、2-19
- ③赤尾光春、「東西ヨーロッパにおける「ユダヤ人信仰」の痕跡を辿る——オトラフテンベルク『悪魔とユダヤ人』(1943)とアンスキー「文化の相互影響」(1923)をめぐって」、『交錯するアート・メディア』（大阪大学グローバルCOEプログラムコンフリクトの人文国際研究教育拠点2007-2009年度報告書）、査読無、(2010)、136-155
- ④赤尾光春、「遅すぎる二国家解決案——未来への提言：解題」、『コンフリクトの人文

学』(大阪大学出版会)、査読無、第二号、(2010)、264-277

〔学会発表〕(計4件)

- ① 赤尾光春、「否定のシオニズム——ヨセフ・ハイム・ブレンネルとイデオロギー批判の臨界」大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文学」主催シンポジウム「シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克」、2010. 10. 10、東京麻布台セミナーハウス
- ② 赤尾光春、「『捕囚の中の捕囚』としてのロシア—ハバド・ルバーヴィチ・ハンディズムとユダヤ教信仰の存続をかけた地神学」日本ユダヤ学会第5回学術大会、2008. 10. 31、早稲田大学
- ③ 赤尾光春、「ワシーリー・グロスマンとデル・ニステル—ソ連『ホロコースト文学』の起源」、日本ロシア文学会第58回定例総会、2008. 10. 11、中京大学
- ④ 赤尾光春、「ユダヤ教とイスラームの横断的研究に向けて」京都ユダヤ思想学会第二回学術大会(シンポジウム「宗教学から見るユダヤ教とイスラーム」)、2008. 6. 7

〔図書〕(計3件)

- ① 赤尾光春・早尾貴紀(編) 白杵陽(監修)、明石書店、『ディアスポラから世界を読む』、(2009)、464ページ(45-79, 375-400)
- ② 市川裕・白杵陽・大塚和夫・手島勲矢(編)、岩波書店、『ユダヤ人と国民国家』、(2008)、374ページ(278-319)
- ③ ジョナサン&ダニエル・ボヤーリン(著)、赤尾光春・早尾貴紀(訳)、(2008)、417ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤尾 光春 (AKAO MITSUHARU)
大阪大学・人間科学研究科・特任助教
研究者番号：90411694